故郷（5）

魯迅
竹内好 訳

（ある日の午後、「私」は三十年ぶりにルントウに会いました。）

彼（かれ）は後ろを向いて、「シュイション（水生）、旦那様（だんなさま）にお辞儀（じぎ）しな。」と言って、彼の背に隠（かく）れていた子供を前へ出した。①これぞまさしく三十年前のルントウであった。いくらか痩（や）せて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違（ちが）いはあるけれども。「これが五番目の子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりまして……。」

母とホンルが二階から下りてきた。話し声を聞きつけたのだろう。

「御隠居様（ごいんきょさま）、お手紙は早くにいただきました。全く、うれしくてたまりませんでした、旦那様がお帰りになると聞きまして……。」と、ルントウは言った。

「まあ、②なんだってそんな他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の仲じゃないか。昔のように、③シュンちゃん、でいいんだよ。」と、母はうれしそうに言った。

「めっそうな、御隠居様、なんとも……とんでもないことでございます。あの頃（ころ）は子供で、何のわきまえもなく……。」そして、またもシュイションを前に出してお辞儀させようとしたが、子供ははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

「これがシュイション？　五番目だね。知らない人ばかりだから、はにかむのも無理ない。ホンルや、あちらでいっしょに遊んでおやり。」と、母は言った。

言われて、ホンルはシュイションを誘（さそ）い、シュイションもうれしそうに、そろって出ていった。母はルントウに席を勧（すす）めた。彼はしばらくためらった後、ようやく腰（こし）を下ろした。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「これぞまさしく三十年前のルントウであった」とあるが、このあと、三十年前のルントウと「私」のように、シュイションとホンルがすぐに仲よくなることが読み取れる一文がある。その文の最初の三字を書きぬきなさい。

(2) ――線②「なんだってそんな他人行儀にするんだね」とあるが、ルントウはなぜこのような態度をとっているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア 身分や立場の違いをわきまえるべきだと考えているから。
イ 「私」に長く会わなかったので、距離を感じているから。
ウ 子供の頃からの親しみを礼儀で示そうとしているから。

(3) ――線③「シュンちゃん」とあるが、ルントウはこの人物のことを何と呼んでいるか。適当なものを選びなさい。

ア 御隠居様　イ 旦那様　ウ 水生

(4) かつての「私」とルントウの関係を表す言葉を本文中から四字で探し、書きぬきなさい。